

ハンドアウト (4/21)

日本語の起源－環太平洋言語圏の 1 言語として－

①

日本語は、単系的な起源よりは、むしろ複源的な形成を問うべきだという認識が定着し始めていると言えよう。他に類例を見ない語族蝟集（一つの場所に多くのもが一度に群がること）である環北太平洋域には類型的多様性があり、言語類型論の深化に必要な得難い言語材が言わば手付かずの状態にある。形成論を棚上げしたままでは行きづまった日本語の由来問題に風穴を開ける‘break through’の可能性は望めない。そもそも系統関係の定かでない孤立した状況は日本語だけではない。環北太平洋域の諸言語はむしろ、こうした状況がおおむね普遍的であるとさえ言える。これらの言語がおのおの形成されてきた歴史的背景は、日本語と多少とも類似あるいは相通じる性質のものであると考えられる。この地域にあっては言語の系統的多様性がそれこそ自然な常態であったのであろう。

②

日本語の系統を問うという課題は、古く 19 世紀半ばから外国人研究者を中心に提起されるようになった。¹ その当初から現在に至るまでの研究史を俯瞰的にまとめると、およそ次のようになろう。まず戦前のものでは、

新村出（1911）「国語系統の問題」

金田一京助（1938）『国語史の系統篇』

¹ 主に西欧の東洋学者・外交官による（ドイツ人 Klaproth、イギリス人 Aston ら）。佐佐木（1978:307,309-310）にその経緯が記されている。メイエ / 泉井（1954:390）：「クラブロート、[...] およびシーボルトなども同時にまた日本語の帰属の問題を考え、これを系譜的にウラル・アルタイ語に属せしめたのであるが、もちろんその所説には十分に学的な根拠が認められるわけではなかった」。現状は、松本（2007:73）：「日本語の系統をめぐってすでに百年以上、内外の多くの学者が議論を重ね、さまざまな説が提起されてきた。しかし今なお、最終的な結論に達するにはほど遠い状況にある」というところである。

は、そのアリアン・フィン兩語族同系新論ともいふべきものを建つるに方つても、印歐語學の成績そのものを利用し、所謂糧に敵に由つた趣がある。「若し假に既往二十年間の新研究に促がされて、過大の概括を試みたら、印歐語と支那語とを結付けるのも易々たるのみであるが、堅實な地歩と感ずる所からは、自分は一步も踏出さなかつたのである」と自白したに由つても、早計者流を赧然たらしめるのである。汽車や汽船や自動車が発明されなかつた前に、早くも空中船を夢みた所に、學術の進歩が暗示されようけれども、さりとてラセラスとブレリオールを同一視することは出来まい。

近時の學界に於て、日本語の系統を論ずるものは、大抵其所謂ウラル・アルタイ系に屬することを首肯する様であるが、又日本語とマレー・ポリネシア語との關係を證明しようとする學者もある。但し、其關係といふのが、系統上同源といふ意味だと明かに説いた人は未だ無かつたと覺えてをる。又後世の字音が入る前に、古代の支那語から幾多の語が我國語中に混入して、夙に同化して日本語の如く成つて仕舞つたと説く人達も、これに由つて兩國語の同系を證明しようとするのではな

が挙げられる。そして戦後の論考の中で比較的まとまったものとしては、²

村山七郎（1961）『国語系統論・比較研究の歴史』

亀井孝（1963）『日本語の系統』

池田次郎・大野晋（1973）『論集 日本文化の起源』

村山七郎・大林太良（1973）『日本語比較研究の歩み』³

² 大野（1952）「日本語の系統論はどのように進められて来たか」『国語学』10輯 も示唆的である。

³ 「日本語における非アルタイ語的要素に注目した結果、そこに、マライ・ポリネシア語起源とかがえうる要素をすくなくみとめた」（佐佐木 1978:337）という趣旨である。

泉井久之助（1975）『マライ・ポリネシア諸語—比較と系統—』⁴

小沢重男（1976）『日本語の系統』

があると言えよう。⁵ いずれも従来の諸説およびその方法論を建設的に批判し自説を展開している。⁶ ただ、現状としては結局のところ、日本語の系統というテーマのもと提唱されてきた数多くの論考をもってしても、学界の承認が得られるような形で日本語と同系であると証明された言語は皆無であり、⁷ 日本語の系統は現在に至るまで不明のままであると言わざるを得ない。ただ、この日本語の起源という課題はたった 100 年ほどの間、新しい諸説が現われては消え、消えては現われるのを繰り返してきた、いかにも果てしなくロマンのあるテーマではあると言えるかもしれない。⁸

これまで日本語の起源に関し行われてきた諸々の考察が提示している学説は実に多岐にわたっており、⁹ 世界中の実にさまざまな言語が日本語の同系言語と

⁴ マライ・ポリネシア語的な語彙は日本語の基層的要素であったと考えられる。崎山（2017:66）：「日本列島に最初に渡来した語族は、紀元前 2,500 年から 1,500 年にかけて、マライ・ポリネシア諸語からオセアニア諸語（メラネシア語派・ポリネシア語派）へと分岐する過程の言語変化を反映した特徴をもっていたと考えられる」。

⁵ 泉井（1975）で述べられているように、オーストロネシア語族の日本語への関与はあくまで語彙レベルにとどまり文法レベルで働いた形跡はないと見るべきであろう。

⁶ これら以外にも、泉井久之助（1953）・服部四郎（1999）ら幾多の有益な研究がなされてきている。泉井は、日本語と南島諸語は同系ではないが、南島諸語が日本語の基層言語であるとの見解を示している。同様に、村山（1978,1979,1988）はオーストロネシア語を年代的に（アルタイ諸語のツングース語に先立つ）古い層と捉えているのに対し、川本（1978）は別の見解を示しており、アルタイ的な基層の上にオーストロネシア語が重なったと解釈する。

⁷ 崎山（2017:iii）：「昨今、広く生物の、そして人類の分類原理である DNA 分析だけを一人歩きさせて、あたかも言語系統に直接の関係があるかのように説く人もいるけれども、そのような論がどれだけ言語系統論に寄与し、方法論としての理解が得られるかは未知数である [...] 遺跡や遺物、DNA だけでは言語についての情報源にはならない」。また、崎山（2017:8）：「DNA は、言うまでもなく自然科学的分類原理である。これが文化あるいは言語の形成原理とパラレルにならなければならない必然性はまったくない」。

⁸ 松本（2007:183）：「これまで多くの人々は、“日本語のルーツ”を尋ねて、ひたすらユーラシアの内陸部へと目を向けてきた。日本語の系統論が出口のない袋小路に陥ったまま今日に至ったのも、その当然の帰結と言わなければならない」。

⁹ メイエ / 泉井（1954:393）：「けだし世界においても日本語ほどひろく、さまざまに、他の言語に関係づけられようとした言語もなかったと思われる。[...] これらの試みはいず

して提唱されてきた。それらの諸説は以下のようにまとめられる。

- (1) 北方アジアの諸言語に系統を辿る
 - ・(ウラル・) アルタイ諸語の一つとみなす説
 - ・朝鮮語と結びつける説
- (2) 南方アジアの諸言語に系統を求める
 - ・マライ・ポリネシア語に属するとする説¹⁰
 - ・チベット・ビルマ語と結びつける説
- (3) 印欧語に結びつける説
- (4) その他¹¹

こうした分類の中のいずれの学説も、これまで証明に成功したものはない。¹² 学者たちの究明の努力に拘わらず、日本語の1方言と目すべき琉球語を除いて、日本語と同系であることが明らかにされた言語は1つもないのである。¹³

③

一般的な認識としては、日本語の語順や後置詞は北方系、開音節であることや語彙の一部は南方系とみなされている。

縄文時代前期(紀元前4000年頃)に人口の急増が見られるが、これは南方的な文化要素を含む地域的な特色をもっていた、そして次に弥生時代になると、水田稲作または焼畑耕作を伴って再び人口が爆発的に伸びる。→ この二度の人口急増が二度にわたる南方からの民族の渡来と合致する。

れも要するに断片的な言語事実の間におけるむしろ偶然的な『一致』に敢えて論拠を置かんとするものであって、特に学術的に考慮せられる価値に乏しいのはいうまでもない。

¹⁰ メイエ / 泉井(1954:394) : 「南島諸語に対する日本語の交渉は、大体において語詞の借用の関係であって、その間に系譜的な親族性を定立することは厳密には困難であろうと思われる」。また、さらにアボリジニ(オーストラリア)と、マライ・ポリネシア諸語、パプア諸語との親縁性を唱える説もあるが、これについて、メイエ / 泉井(1954:733)は「これは信ずることができない」と述べている。

¹¹ アイヌ語系統説などが含まれる。

¹² 崎山(1978:144) : 「日本語の系統論の山場はなんといっても動詞の活用体系の組織を明らかにすることであろう。それに対して南島語がまったく無関係であったのか、なかったのか。日本語の側からネガティブな証明をしてみればそれで済むところが、それができないところに、日本語の系統論の根本的な困難さがある」。

¹³ 崎山(1978:140) : 「原南島語と古代日本語との間の音韻対応関係を始めて示したのは泉井久之助である。泉井は、日本語は系統的には一つでやはり北方的・大陸的なものであると、南島語的な要素がもしあるとしても、その北方的な構図(音韻法・造語法・形態法・統辞法の体系)の下に潜む異系の要素の一つとみる」。